

〔露地用イチゴ新品種の特性を活かした栽培管理技術の開発〕

## 「東京おひさまベリー」の春定植の可能性

海保富士男・木下沙也佳・野口 貴・沼尻勝人  
(園芸技術科)

---

【要 約】「東京おひさまベリー」を春定植すると、10月定植の慣行栽培と比べて果実が小さくなるが、2月28日定植では慣行栽培に近い収量を得ることができ、栽培日数も1/3に短縮できることから、春定植の実用化の可能性はあるものと考えられる。

---

### 【目 的】

イチゴの露地栽培は、栽培期間が長く、圃場の占有率が高い。そこで、新品種「東京おひさまベリー」が、都内の少量多品目の野菜生産のなかに取り入れるため、栽培期間を短縮ができ、圃場の有効活用が図れる春定植の可能性について明らかにする。

### 【方 法】

「東京おひさまベリー」を2017年8月31日に仮植し、10月26日に株間30cmの2条千鳥で定植した。当該慣行で栽培した慣行区および慣行区の一部を表1のとおり2月26日から保温した区を設けた(保温区)。春定植は、8月31日に仮植した苗を2018年2月28日(2/28区)および3月13日(3/13区)に定植し、それぞれの定植日から保温区と同様の保温を行った。1区16株の3反復で生育、収量および果実品質について調査した。

### 【成果の概要】

1. 保温区および2/28区では、日中(9~15時)で被覆下の気温が30℃以上になり、マルチ下の地温も慣行区より常に5℃高く推移した(図1)。
2. 保温終了時の生育は、春定植で10月定植に比べ葉柄長が短くて草丈も低くなり、ランナー数が少なく、とくに3/13区の生育は慣行区より劣った(表2)。また、収穫開始日は、3/13区で慣行区と同じだが、2/28区では慣行区より6日ほど早い保温区と同じであった。収穫終了日は春定植で早まる傾向にあった。定植から収穫終了までの栽培日数は、春定植で10月定植の1/3程度と少なくなった。
3. 可販果収量は、慣行区と比べて3/13区で約50%と明らかに少なかった(図2)。一方、2/28区の可販果収量は慣行区や保温区の10月定植と差がなかった。また、春定植の両区とも10月定植の両区と比べて15g以上の大果収量が少なくなった。
4. 収穫果数は3/13区で慣行区より明らかに少なかったのに対し、2/28区が慣行区と差がなかった(表3)。果実重は、春定植の両区ともに慣行区より明らかに小さかった。しかし、春定植の両区と保温区では果実重に明らかな差はなかった。また、10月定植でも保温区は慣行区より収穫果数がやや少なく、果実重も小さくなる傾向にあった。
5. 果実形質は、果実硬度、糖度および酸度ともに10月定植と春定植の間で明らかな差は認められなかった(表3)。不良果の発生には、はっきりとした傾向は認められなかった。

### 【残された課題・成果の活用・留意点】

1. 春定植の果実を大きくして10月定植の慣行栽培に近づけるため、育苗方法(ポット育苗、仮植時期)、本圃への定植時期、保温方法などの栽培管理技術を明らかにする。

表1 各処理区の保温資材の使用開始および終了時期、施肥量

処理区	定植日 (月/日)	マルチ <sup>z</sup> (月/日)	被覆 <sup>y</sup> 開始 (月/日)	べたがけ <sup>x</sup> 除去 (月/日)	トンネル <sup>w</sup> 除去 (月/日)	施肥量		
						N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
慣行区	10/26	3/12	—	—	—	18	20	18
保温区	10/26	2/26	2/26	3/16	4/17	18	20	18
2/28区	2/28	2/26	2/26	3/16	4/17	10	20	10
3/13区	3/13	3/12	3/13	3/16	4/17	10	20	10

z) 黒マルチ y) トンネルおよびべたがけを同時被覆 x) パスライト w) ダイオベタロンDT-650

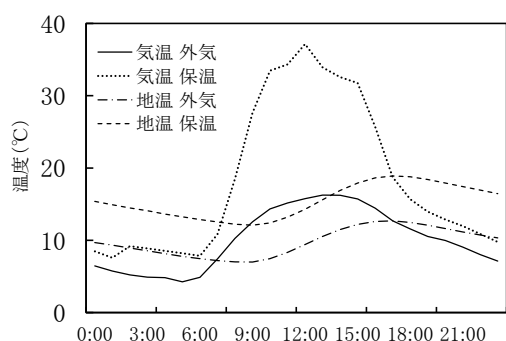


図1 保温時の気温および地温  
(2/28~3/6日周平均値)

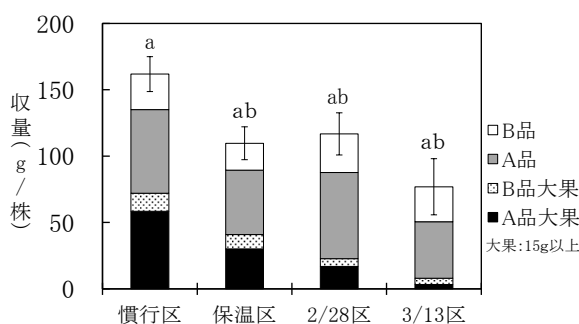


図2 可販果の規格別収量

異なる英小文字間にはTurkeyの多重検定により5%水準で有意差あり。  
図中の縦棒は標準誤差を示す(n=3)。

表2 生育状況 (トンネル被覆終了時 2018/4/17)および収穫開始日

処理区	草丈 (cm)	頂小葉		葉柄長 (cm)	ランナー数 (本/株)	収穫 <sup>z</sup> 開始日 (月/日)	収穫 <sup>y</sup> 終了日 (月/日)	栽培 期間 (日)
		葉身長 (cm)	縦横比					
慣行区	42.9 a <sup>x</sup>	11.5 b	1.30	31.5 a	6.2 b	4/29	5/28	214 a
保温区	42.1 a	12.6 a	1.28	29.5 a	10.0 a	4/23	5/26	212 a
2/28区	37.3 ab	12.3 a	1.29	24.9 ab	4.0 c	4/23	5/21	82 b
3/13区	32.4 b	11.4 b	1.26	21.1 b	2.4 d	4/28	5/18	67 b

z) 各区収穫に達した日  
y) 各区で可販果が最後に収穫に達した日  
x) 異なる英小文字間にはTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり。

表3 東京おひさまペリーの春定植が収穫果数, 平均1果重, 不良果および果実品質に及ぼす影響

処理区	総収穫果		可販果 <sup>z</sup>		主な不良果			果実形質		
	果数 (個/株)	1果重 (g/株)	果数 (個/株)	1果重 (g/株)	小果 <sup>y</sup> (個/株)	軟化・ 灰カビ (個/株)	奇形 (個/株)	硬度 <sup>x</sup> (kg)	糖度 (°Brix)	酸度 (%)
慣行区	24.2 a	9.5 a	13.3 a	12.1 a	4.1 ab	3.9	0.8 b	0.39	8.1	0.55
保温区	20.9 ab	8.5 ab	9.6 ab	11.4 ab	5.9 a	2.3	1.8 a	0.39	8.5	0.53
2/28区	21.1 ab	7.8 b	11.5 ab	10.0 b	5.4 ab	2.3 <sup>ns</sup>	0.7 b	0.38 <sup>ns</sup>	8.5 <sup>ns</sup>	0.61 <sup>ns</sup>
3/13区	16.6 b	7.5 b	7.9 b	9.8 b	3.6 b	2.5	1.3 ab	0.37	8.8	0.59

z) A品とB品を合わせたもの。  
y) 6g以下の果実  
x) 果実硬度計(円錐型Φ12mmプランジャー)の陥入抵抗値  
w) 異なる英小文字間にはTukeyの多重検定により5%水準で有意差あり (n=3)。